

『立圃桃廼酒百韻』の周辺

河村 瑛子

一 『立圃桃廼酒百韻』について

慶安五年三月、立圃は摂津国富田にあった。米谷巖「野々口立圃年譜稿」⁽¹⁾ 同年同月条には次のようにある。

三月三日、摂津富田にて大坂の門人ら十六名と「桃の酒百韻」(自筆一卷、松宇文庫藏) 興行。

「桃の酒百韻」とは、伊藤松宇「俳諧珍書目録」(『俳句講座第九卷』改造社、一九三三) に、

桃の酒百韻一卷 一冊 野々口立圃筆

慶安五年三月三日立圃の発句に利房・有次・定清・仲昔・知徳・成次・光忠・宗之・宗順・正近・了順・宗甫・宗貞・正能・久重等立圃一派の俳人十六名相会して摂津富田に於て興行したるもの。松宇文庫所藏。

として掲載される立圃自筆の一卷をいう。米谷巖「野々口立圃」⁽²⁾ にも、

慶安五(承応元) 年三月三日、摂津富田で、大阪の一門十六名と興行した桃の酒百韻の自筆一卷が松宇文庫にある(改造社『俳句講座』第九卷、俳諧珍書目録)。

と「俳諧珍書目録」にもとづく指摘があり、『貞門談林俳人大

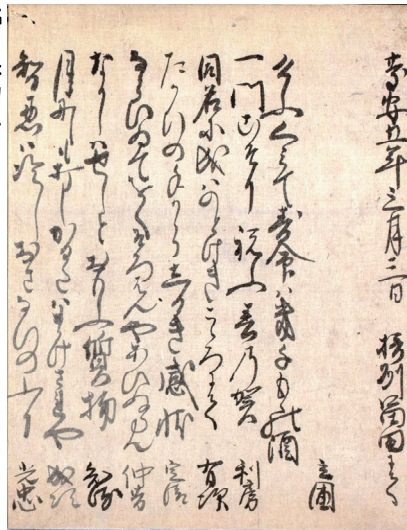
観』の本書の項目にも、やはり同目録によって連衆十六名が掲出されるものの「原本未見」と記される。つまり、本書は講談社の所蔵にかかる松宇文庫の目録には見えず、原本の所在は長く不明となっており、影印翻刻なども備わらないために作品の全貌を知ることがかなわなかった。

先だって、京都府立京都学・歴史館(旧京都府立総合資料館、以下「歴史館」) に、故新免安喜子氏の遺志により、和装本を中心とする九三〇点余の図書が寄贈された⁽³⁾。寄贈書の約七割が戦後行方知れずとなっていた伊藤松宇の旧蔵書であり、その中に、上記『桃の酒百韻』が含まれることが判明したので、ここに報告することにした。

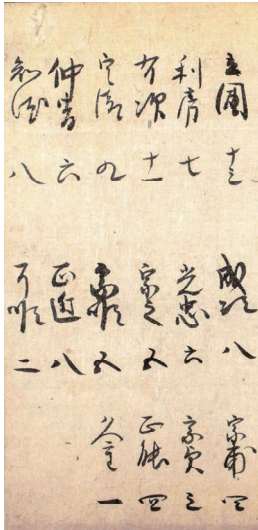
歴史館蔵『立圃桃廼酒百韻』(以下「桃廼酒百韻」) の略書誌は以下の通りである。写本一冊。立圃自筆。枡形本に近い半紙本。縦二〇・四糎、横一七・〇糎。後補海老茶色表紙、布目(型押)、芭蕉葉散らし文(空押)。後補書題簽「立圃桃廼酒百韻」(左肩单边)。内題なし。料紙は厚手の楮紙(裏打あり)。一丁は二枚の紙から成り、一方を丁の表、他方を裏とし、柱にあたる部分を薄く貼り合わせて袋綴の如く装丁する。半丁十三行で、折端にあたる部分に紙継ぎがないことから、懷紙の改装ではな

く、もとは卷子本であつたものと思われる。天部に裁断の跡があり、折番号の注記が一部欠損している。印記、「松宇愛蔵門外不出」「松宇圖書之印」。

【図一】『立圃桃酒百韻』巻首（京都府立京都学・歴史館蔵）



【図二】同書句上



内容は立圃の「けふくみて寿命は幾千もゝの酒」を発句とす

る百韻である。端作に「慶安五年三月三日 撰州富田にて」とあり（図一）、成立時期が知られる。発句に詠まれる「もゝの酒」は、『増山井』（季吟著、寛文七年奥刊）三月条に、

桃花の節 三日。桃の酒、俳。（中略）けふ桃花を酒にひたしてのめば、百病を除き顔色をますと本草にありとかや、拾芥抄にいへり。

とあるように、上巳の節句に飲めば百病を除くとされる。当該句は、今日これを飲めば、（一座で共に）長寿を保つことがでさるだろうと詠うもので、時宜にかなう。巻末の句上には、たしかに「俳諧珍書目録」に記された十六名が見える（図二）。協句「一門こそり祝ふ春の賀」を詠む「利房」が俳席の主催者、一句のみを詠出する「久重」が執筆であろう。

本書の成立事情について、書中から得られる情報はさほど多くない。たとえば連衆については、本文・句上ともに俳号を示すのみで、姓や肩書、所付が示されないため、同名異人との判別がしにくい。かろうじて特定できる者を挙げれば、次の通りである。

定清…京住。服部氏。通称喜三郎。『鷹筑波集』（寛永十九年刊）以来、入集書多数の古参俳人。『尾蠅集』（寛文三年刊）の編者。
仲昔…京住。中野氏。『俳諧百人一句』（万治三年刊）、『慕繁集』（同年刊）などに入集。
知徳…京住。福井氏。『俳諧百人一句』、『慕繁集』などに入集。
正近…京住。中村氏。『沙金袋』（明暦三年刊）、『慕繁集』などに入集。

了順：伏見住。吹田氏。『糸瓜草』（寛文元年刊）に入集。

このほかの連衆については手がかりに乏しく、確定が難しいが、富田において巻かれた本百韻に京都の俳人が相当数一座するところは確かであろう。本書は一体どのような経緯で成立したのだろうか。

二 『撰津富田俳諧紀行』と『六日の菖蒲』

幸い、立圃はこのときの旅を材とした紀行句文を残している。柿衛文庫に所蔵される自筆卷子本のほか、慶安二年頃から寛文二年頃の句文を集めた『六日の菖蒲』（近世後期写、国立国会図書館蔵）^④にも収録され、互いに少なからぬ異同がある。これらを併せ読むことで、『桃廼酒百韻』の成立事情はほぼ明らかになる。

柿衛本の略書誌を記せば以下の通りである。写本。卷子本一軸。縦一九・七糎、横四二・一糎。書名「撰津富田俳諧紀行」（仮題）。『柿衛文庫目錄書冊篇』には「撰津多田俳諧紀行」とある。外題・内題なし。奥書「立圃書之（花押）。立圃自筆と思しい。絹表紙、若草色地に菊花・木瓜文。見返、金銀銅切箔・揉箔・砂子散らし。料紙は楮紙。裏打あり。少虫損あり（一部補修済み）。桐箱入。添付文書中に、白雲堂書店の主人、古家実三の葉書一通（岡田利兵衛宛、昭和三十七年一月十三日消印）があり、文中に「此程九州地方を旅行中ふと俳書としての珍品を入手しましたから御一覽に供し度、本日郵送いたしました。野々口立圃の撰津富田俳諧紀行の自筆本（卷子本）です。是は先生にお持ちいただくのが適材適所とおもひまして」（私

に句読点等を補った）とある。

内容は、某年三月三日から七日にかけて、立圃が門人とともに撰津国富田を訪れた際の紀行句文である。「あるじ」の家に滞在中、金龍寺・普門寺へ花見に赴き、また近在の名所である箕面滝を訪れ、折々に詠まれた自他の句を書き留める。書中に年記はないが、三月三日条に『桃廼酒百韻』の発句「けふくみて寿命は幾千もゝの酒」が見えることから、慶安五年の紀行と知られる。

以下、まずは柿衛本によりながら紀行のあらましを述べ、『桃廼酒百韻』の成立背景を探りたい（適宜【A】～【F】の記号を付した）。冒頭には以下のようにある。

【A】

撰津国富田にすめる人を尋ねべきとて、その人かの人七、八人かたらひ、鳥羽より船にのり、けふは日もうらゝなり。
「いかにも心を慰めて」など、口々いへるに、まづ例のさ
れたることを

盃か曲水をなす遊び舟

鳥羽（現京都市伏見区）より川船に乗り、富田に赴く。同行した「その人かの人七、八人」は、『六日の菖蒲』が該当箇所を「爰なる友達七、八人」とすることから、京都周辺の俳人であると思われる。「いかにも心を慰めて」は謡曲『熊野』の詞章「いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、ともに心を慰まんと」による。平宗盛が帰郷を望む熊野を清水寺の花見へ誘う台詞であり、本紀行の目的の一である金龍寺の花見と対応する。船を曲水宴の盃に見立てた発句より、三月三日の記事であることが知られる^⑤。続いて次のような描写がある。

いそぐとはなけれど、はや彼所近き河岸に、舟さしよせて、ひそかに案内したりけるに、あるじ心よげに打うなづき、「月ごろ問ざりつるうらみ、今こそわすれ侍れ」などたはぶれ、おくなる屋にひきいれ、「かゝるみなかずみをとはれけるは、浅からぬ心にこそ」といへるに、猶おくゆかしく成て、爰かしこの戸障子をひらき見るに、中々心も詞も及がたく、広き所あり、又せばき座敷あり、所々にめづらかなる物ずきをつくし、遙にへだたりたるかたには、廊をつゞけ橋をわたし、庭には太山をうつし、名もしらぬ草木をうへ、池には遠き海辺の石をたゝませ、中嶋の心ばへ、いと見所おほく、そのかたつかたより滝波をおとし、まことに春秋のながめ、とこしなへなりけらし。

「いそぐとはなけれど、はや」は「急候程に、是ははや津の国須磨の浦とかや申候」『松風』のような謡曲の典型的表現を踏まえる。富田に着くと「あるじ」は、立圃の無沙汰を託ちながら訪問を喜び、自邸に案内する。建物の至る所に数寄を凝らし、庭園には、珍しい草木を植え、池に遠国より取り寄せた石を畳ませるなど、風流の限りを尽くした大邸宅であった。さらに以下のような描写が続く。

【B】

又一かたに薨長く、こなたかなたへつゞきたるあり。是は杜康が造りそめし跡をゝひ、仙人のおる菊の露をたゝへをける所なりといへるに、心先さへぎりて、皆人入て見わたすに、瓶の数、いくらかともかぞへがたし。かゝる所、又いづくにかあらんとおもはれ、口に涎をながすばかり也。遠き国々まで名だかくきこふるは、ことほりなりかし。ちか

きあたりに秋のたのみ広くしめて、よはひの末のたのしみ兼てしられたり。折しもけふは三月三日也。ことぶきの句を、とあれば、

けふくみて寿命は幾千もゝの酒

「杜康」は古代中国で初めて酒を造ったとされる人物であり、「仙人のおる菊の露」は、謡曲『枕慈童』などで著名な菊慈童の故事により、酒を指す。つまり、邸宅の傍らにある「杜康が造りそめし跡をゝひ、仙人のおる菊の露をたゝへをける所」とは酒蔵であった。「心先さへぎりて」（気持ち先だつて）酒蔵に入ると、無数の酒瓶が並ぶ（^あ）。近世初期の富田は「遠き国々まで名だかくきこふる」銘醸地であり、『毛吹草』（正保二年刊）四・摂津の名物にも「富田酒」が挙げられる。傍線部では続いて「あるじ」の所有する広大な田地に言及し、老後の安樂が約束されていることを述べる。このとき、上巳の賀句を乞われた立圃は「けふくみて」句を詠んだ。右の記述を勘案すれば、当該句は、桃の節供に際して長寿を願うのみならず、造酒家である主人への挨拶の意を含むことが知られる。

ここで注目されるのは、風雅な邸宅と、「名もしらぬ草木」を植えた庭園の「春秋のながめ、とこしなへ」なるさまを筆を尽くして描写した後、杜康や菊慈童の漢故事を用いて酒蔵を殊更に婉曲的に表現し、さらに「かゝる所、又いづくにかあらん」と、非日常性を強調する点である。「あるじ」の邸宅は、桃の節供という時節や、冒頭の船路の描写と響き合いながら、桃郷のごとき別天地として描かれているのである。

三月四日条には、金龍寺での花見が描かれる。

【C】

四日には金龍寺の花を見せんとこそ。さかりなれとて、馬乗物をいそがせ、麓よりは手に手をくみて、心しづかに分のぼる道の程より、左右と目もおどろくばかりの花ざかり也。音に聞えし入相の鐘までと、うたひまひて、酔のまぎれに、

釣鐘の龍頭におほへ花の雲 立圃

以下、『桃廼酒百韻』の連衆および光重・道夫・良政の発句各一の計十九句が記される。邂逅山金龍寺（現高槻市成合。昭和二十六年の本堂移転後は無住。仮本堂も同五十八年に焼失）は天台宗の古刹で、『山の井』（季吟著、正保五年刊）「桜」条に「吉野 金龍寺」とあり、吉野とならば桜の名所である。「音に聞えし入相の鐘」とは、能因の古歌「山ざとのはるの夕暮きて見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける」（新古今集・春下・一一六）を指し、『新古今増抄』（加藤磐斎著、寛文三年刊）の当該歌注に「金龍寺にてよみけるとなり」とあるように、当寺の鐘を詠んだ歌として知られた。立圃は、これを踏まえ「釣鐘の龍頭」（龍頭は鐘の釣手の意）を詠み込み「金龍寺」に利かせて挨拶とし、さらに花を雲に見立てた「花の雲」に「龍」の縁語「雲」を組み込んで一句を仕立てた。「心しづかに」は、「心静かに社参申さばやと思ひ候」（『采女』）のような謡曲の典型的表現によるものであろう。この時の花見の発句の中には、邂逅山金龍寺の花をまらうどに見せけるよろこびを、あるじかたより、

御光儀やたまさか山の花の友 利房

とあり、ここで初めて『桃廼酒百韻』で脇を務めた「利房」が「あるじ」であったことが確認できる。利房句は、金龍寺の山

号「邂逅山」を「たまさか山」として詠み込み、立圃一行の「たまさか」なる訪れと、一門とともに花を愛でる機会を得たことを喜ぶ亭主らしい吟である。

翌五日には、箕面滝を見物し、

三水に竜やみのおの花の波 立圃

以下、滝を詠んだ発句計十二（有次・仲昔・知徳・正近・宗之・成次・定清・光忠・宗順・宗甫・利房各一句）が配される。『桃廼酒百韻』の連衆のうち冒頭で指摘した京住の俳人が含まれており、見物には立圃が京都より伴った俳人が複数同行したと考えられる。

続く三月六日条には、

【D】

六日には、上巳の句の跡を人々いひつゞけよとてとぞめられ、永々しき日をわすれ暮しぬ。

とある。「上巳の句」は、前掲【B】で「折しもけふは三月三日也。ことぶきの句を」と乞われて詠んだ「けふくみて」句である可能性が高い。その「跡」を「いひつゞけよ」とは、当該句を発句として百韻を巻くよう求められたことを指す。ここから『桃廼酒百韻』の端作「三月三日」は発句に対するものであり、百韻全体は三月六日の出来であることが知られる。『桃廼酒百韻』は、このときの懷紙を立圃が清書し、卷子本に仕立てたものであろう。以上の経緯を踏まえると、利房の脇句「一門こそり祝ふ春の賀」の背景に、京・摂津の立圃一門が一堂に会して節供を祝い、春遊に興じつつ俳席を持った喜びがあることを、より具体的に捉えることができる。なお同日条には、普門寺（臨濟宗妙心寺派）へ花見に訪れ、「和尚」（あるいは竜溪

性潜か」と面会した記述もある。

翌三月七日、立圃は惜しまれながら富田を發ち、帰洛する。知徳による餞別発句に続いて次のような記述がある。

【E】

「都人にゆきてかたらん山桜風よりさきにきても見るべく」と、むかし人はいへり。我は日ごろ数しらぬ情の程をかたらんと思ふ心を

花の香や袖につゝみてみやげ物 立圃

引用される「都人に」歌は、『源氏物語』若紫巻、

山水にこゝろとまり侍ぬれど、内よりおぼつかながらせたまへるもかしこければなん。いまこのはなのおりすぎさずまいりこん。

みや人にゆきてかたらん山桜かぜよりさきにきてもみるべく

との給ふ御もてなし、こはづかひさへめもあやなるに（後略、承応三年版本による）

にもとづく。ただし『撰津富田俳諧紀行』は初句を「都人」「六日の菖蒲」も同文）に作る^(七)。本歌は、光源氏が北山を去る際、再来を約しつつ僧都に贈った歌で、『連珠合璧集』「宮人」にも引かれて著名である。当地の桜の素晴らしさを都人に語ろうという源氏詠を踏まえ、立圃は、「日ごろ数しらぬ情の程」つまり、この数日間に富田で受けた厚情について、都人に語ろうと述べ、利房への謝意を示している。

本紀行は以下の記述で結ばれる。

【F】

此事を京にて物がたりしければ、

花や滝見る心ちする歌ばなし 重方

【E】は【F】に直結し、帰途の描写はない。重方は京住の俳人（望月氏。通称八右衛門。『鷹筑波集』等に入集。重方句は、紀行全体を立圃の「歌ばなし」と捉え、当地の花や滝を眼前に見る様だと詠う。この一句は、立圃の「都人」へ「かたらんと思ふ心」が真実であり、たしかに実践されたことを示す利房への挨拶であるとともに、あたかも別天地への旅のごとく描かれた本紀行を、一篇の「物語」として終結させる役割を担う。

ここで、柿衛本の性格を考えるために、『六日の菖蒲』所収本文との異同のうち主なものを挙げる（柿衛本に付したアルファベットに対応する小文字を付した）。結論から言えば、総じて『六日の菖蒲』は柿衛本に比べて描写が簡潔であり、分量も少ない。最も大きな違いは末尾にあり、『六日の菖蒲』では、

【e】

「都人に行てかたらん山桜」と昔人いへり。我は日ごろ数しらぬ情の程をかたらんと思ふこゝろを

花の香や袖につゝみてみやげ物

と、柿衛本の【E】にあたる部分で結ばれており、【F】に相当する本文を欠く。また、柿衛本と異なり「都人に」歌は上句のみが引用され、読者に求められる教養の程度が柿衛本よりも若干高いように思われる。

また、柿衛本冒頭【A】に対する『六日の菖蒲』の該当部分は、

【a】

撰津国富田にしる人あるをとふべしとて、爰なる友達七、八人、鳥羽より船にあひ乗てゆくに、日もうらゝ也。「心

静に」などいふ時しも三月三日也。たゞにやはとて、

盃か曲水をなすあそび舟

と、「三月三日」の出発であることを明記し、「たゞにやは」と、発句が上巳の節句にあたり詠出されたことを強調する。ほかに、謡曲『熊野』の代わりに【C】で用いられた「心静に」の詞章を引くなど、全体に行文が異なる。同行する者たちを「愛なる友達」とすることから、京の読者を想定しているようにも思われる。

柿衛本【B】にあたる酒蔵の場面は、特に傍線部の異同が大きい。

【b】

(前文はほぼ同文のため省略) かゝる所、又いづくにかあらんと思はれ、口に涎をながす計也。「こゝにて先句ひとつ」といへるに、

けふくみて寿命は幾千もゝの酒

柿衛本【B】の傍線部には、富田酒の名高さ、主の富貴さや晩年の安楽を言祝ぐ記述があり、さらに、ここで紀行文中ではじめて当日が「三月三日」であることを明示し、「けふくみて」一句が節句に際しての挨拶であることを強調する行文となっている。いっぽう『六日の菖蒲』では、これらの記述が一切省略され、紀行冒頭【a】に「三月三日」と明示されることと呼応して、日付についての言及もない。両伝本を比べると、柿衛本には、「あるじ」である利房への殊更なる配慮が看取される。あるいは利房への呈上を想定した本文であったかもしれない。

また、柿衛本には次のような二箇所の見せ消し訂正(「ヒ」と記す)があり、

春の花の波にやうかぶや金龍寺 道夫

花と見るおち瀧つばや砂の物 成次

『六日の菖蒲』では、

春の花の波にやうかぶ金龍寺 道夫

花と見えておち瀧つばや砂の物 成次

と、いずれも訂正後の形が取られている。二例のうち前者は誤写の訂正と思しく、後者はどのような性格の訂正かが不明である。仮に後者が立圃の添削を反映するとすれば、柿衛本が『六日の菖蒲』所収本文の系統に先んずることになるが、現段階では両者の先後関係を判断するのは困難である。しかしながら、いずれにせよ、両者は草稿と清書本という関係性ではなく、想定される読者(贈呈者)の違いによって書き分けられたものであるように思われる。

三 亭主「利房」について

このとき立圃を迎えた亭主「利房」とは誰であろうか。当時の富田において、上記のような瀟洒な大邸宅に住まい、立圃に「かゝる所、又いづくにかあらん」と言わしめるような酒蔵を持つ人物は、当地最大の造酒家、清水市郎右衛門家の当主、清水利房をおいてほかに考えられない。

清水市郎右衛門家は、屋号を「紅屋」とし、関ヶ原の役や大阪の陣には徳川家康に「香物を献上したり、兵糧・竹束・薪な

どの軍用をつとめた由緒により、特權的な酒造株が認められ」
⑧、「將軍代替りにはお目見が許され」、「十七世紀中ころまで村支配の中心的役割を果たした」^⑨ 名家である。すでに諸研究に引かれるところであるが、貝原益軒『有馬山温泉記』（宝永八年刊）「富田」の条に、

酒家おほし。べにやとて大百姓あり、其宅瓦屋いらかをな
らべ作りかさねて、大なる事山のことし。目をおどろかす。
いまだかゝる大農家を見ず。其家族も近所に有。大家なり。
と、近世中期の紅屋の大邸宅を描く記事があり、立圃の記述が誇張ではないことを物語る。

松井良祐『「富田丙午記」解題」^⑩によれば、清水市郎右衛門家三代目にあたる利房は、はじめ左兵衛、のち市郎右衛門を名乗り、寛文十三年、六十七歳で没している。逆算すれば生年は慶長十二年で、文祿四年生まれの立圃より十二歳の若年となる。慶安五年当時は四十六歳であった。『鄙諺集』（安靜編、慶安五年刊）六に、

湘浦ならでうらなり竹や斑雪 清水氏 利房
とあるのはこの人の句であろう。

享保十年から十一年にかけて起こった富田の村方騒動の記録『富田丙午記』^⑪（入江若水著、享保十年序）には、利房についての記事が散見する。大阪の陣の折には「嬰兒」であった利房が父勝由によつて高槻城主土岐山城守へ人質に出されたことが記され^⑫、また、当主となつてからは、

寛永十四年酉年より永井日向守殿・山城神足屋敷の領地に附せられ、慶安元年子年にいたり十六箇年が間、聚斂せられし程に、百姓ことの外に困窮に及ぶ。左兵衛利房（勝由

が嫡男、後ハ市郎右衛門と呼ぶ、法名性貞）ハ江府におもむき、御役人方江内証伝手を以下情を相達ければ、永井殿高槻之城を御拝領の日を待得て富田庄ハ再び御代官所に復りぬ。（卷一。⑧内は割注。以下同）

と、富田庄の民の困窮のために、江戸へ上訴に赴いた逸話が記される。また、同書には、

利房ハ才智すぐれたる士なれば、小堀殿より摂州御代官所小堀殿御下ハ利房へ下支配被仰付、御上納銀數百貫目を、或ハ弐・三年、或ハ四・五年も預り置れ、利房よりハ村々の庄屋にあづけ置、御代官所より江戸御勘定の時にいたり村々より取立、利房方より上納しける故、村々庄屋百姓悦びあふ事無限、こゝを以利房が威勢摂州を掩ふ。然れ共富で驕るの心なく村中の窮阨をすくふこと如し左。（卷一）と、利房が「才智」に優れ、上下よりの信頼を得た名士であったことが綴られ、「富で驕るの心」を持たぬ人柄にも言及する。『富田丙午記』の著者、入江若水は清水市郎右衛門家六代利恒の従兄であり、本書が清水家側の資料であることは考慮すべきであろうが、利房という人物の一面が知られる点で貴重である。

夙に歴史学の分野で指摘されるように、富田の酒造がもつとも盛んであったとされる明暦頃、紅屋は酒造米元高一八〇〇石という卓抜した規模を誇つた^⑬。それからまもなく「万治寛文年間以後減醸令が反復される過程において、富田村酒造業は萎縮」^⑭することとなり、紅屋も「天和二年には遂に酒造をなさず、天和三年には二八・一二五石というきわめて僅かな酒造しか行わない」^⑮と指摘されるように、酒造の規模を縮小し、地主経営に移行する。益軒が『有馬山温泉記』で描いたの

はそのような時代の紅屋であった。

いっぽう『桃廼酒百韻』の巻かれた時代は、富田酒造業がまさに最盛期を迎えようとしていた時期にあたり、本百韻とその周辺の紀行文は、当時の富田の活況を鮮やかに浮かび上がらせる。清水家は、以後も富田の文化的拠点であり続け、近世中期にいたり、清水家の持庵である長福寺水月庵には京・大坂の文人が集い、「長福寺サロン」というべきものが形成される^{（千五）}。

右に述べ来たったような利房を中心とした雅交は、富田に早くからそのような素地があったことを示す具体例としても重要であろう。

『桃廼酒百韻』と『撰津富田俳諧紀行』『六日の菖蒲』は、個々に高い資料価値を有するが、各々単独では多くを知ることが叶わない。書物同士の連関によって、これらの資料はいつそう雄弁に当時のありさまを語ってくれるのである。

四 『立圃桃廼酒百韻』翻刻

【凡例】

翻刻に当たっては私に濁点を付し、漢字は通行の字体に改めた。句には通し番号を付した。また、裁断により文字が欠損しているものは□で示し、推読を（ ）内に傍記した。重ね書きによる訂正を含むもの（95句・97句）は、訂正後の形を示した。

慶安五年三月三日

撰州富田にて

ウ

- | | | |
|----|-------------------|----|
| 1 | けふくみて寿命は幾千もゝの酒 | 立圃 |
| 2 | 一門こぞり祝ふ春の賀 | 利房 |
| 3 | 同名に成はのどけきこゝろにて | 有次 |
| 4 | たがひの手がらしるき感状 | 定清 |
| 5 | ならびゐてをくそろばんやあひぬらん | 仲昔 |
| 6 | ながしはせじとおもふ質物 | 知徳 |
| 7 | 月にしも打しかるたはまけざれや | 成次 |
| 8 | 智恵は冷しおさなひのふり | 光忠 |
| 9 | むつかしきおどりの拍子そろはせて | 宗之 |
| 10 | 馬を自由にのる鞍のうち | 宗順 |
| 11 | あなどりとむかひこそすれ敵の城 | 正近 |
| 12 | 聞をよびたる赤坂の山 | 了順 |
| 13 | 盗人の住し所はいかばかり | 宗甫 |
| 14 | 犬かしましくほゆる闇の夜 | 宗貞 |
| 15 | あふ事のかつてならざる前わたり | 正能 |
| 16 | などてあだめくきる物のつま | 立圃 |
| 17 | 酔ざめは気もうかれめのちは狂ひ | 利房 |
| 18 | ねころび月をみしま江の舟 | 有次 |
| 19 | 神崎や茶屋のちそうは秋もなし | 定清 |
| 20 | 秀句ずきとは露もかくれぬ | 仲昔 |
| 21 | 聞書の口には花の題あげて | 知徳 |
| 22 | 木の継やうをよく習ひけり | 成次 |
| 23 | 幾春も大工の家につかへなれ | 光忠 |
| 24 | 牛につくるはかな山の土 | 正近 |

25 長門より石見へかよふ商ひに
 26 とまりをいそぐ旅の定宿
 27 遊君のなげの情にたらされて
 28 度々たつる誓文は何
 29 いや／＼も三盃くめる酒もりに
 30 御意やをもかる中なをる人
 31 かりそめの詞の論をし出して
 32 鬼をしたがへすますいきほひ
 33 山伏の行力をしる峯入に
 34 おがみこそすれ滝つぼの月
 35 百性は秋にも雨を乞かねて
 36 きりをくまゝに出ぬ材木
 ウ
 37 獣は人の声にやをぢぬらん
 38 功德はふかき経の要文
 39 しづめたる石はながれぬいさは川
 40 蟹のありかをさがす才覚
 41 塩のひく芦辺に鳥おりすはり
 42 熊野道者はしばしとだゆる
 43 ばら／＼と藤代山に時雨して
 44 柴をかる手やつめたかるらん
 45 冬ごもる賤が垣ほをつくりなし
 46 秋にあらひてほす古布子
 47 出がはりは露も隙なき一季おり
 48 月をもめでぬ下女のかはゆさ
 49 おくの間に花簪殿は御寝なり

宗順 宗甫 立圃 宗定 有次 利房 成次 定清 仲昔 知徳 正近 立圃 宗之 光忠 知徳 有次 立圃 成次 利房 宗順 定清 立圃 有次 宗甫 仲昔

□ミ
 50 むかふ火影やかすむ朗詠
 51 永き日の暮れば舞の one かなで
 52 精はつきざる児の学問
 53 山寺の景気はいつも興ありて
 54 のぶるをまゝにためぬ松が枝
 55 色々の物ずき見する台の物
 56 狂歌をかきて出す短冊
 57 をのづからきやしやにおひたつ人心
 58 をくれをなづる髪品々
 59 双六やまけめに成て案ずらん
 60 今姫君のけはひおかしき
 61 つれなさの文にて涙をしのごひ
 62 形見と成しまり本尊
 63 法をとふ師匠も月の昔にて
 64 幾秋の日ををくる表具屋
 □ミ
 ウ
 65 名筆の小鷹の絵こそこぬらめ
 66 八幡宮としるき神前
 67 山崎にゆきゝの人の下乗して
 68 たつる卒都婆は追善のため
 69 真言のこもる一夏やみてぬらん
 70 護摩のけぶりもふかき岩穴
 71 国土にはまえんのものゝ住がたみ
 72 くらくくとをれ野道山みち
 73 こま／＼と急ぎの状を認て

知徳 立圃 正近 成次 宗之 光忠 正能 久重 有次 知徳 立圃 利房 仲昔 有次 定清 立圃 光忠 了順 宗順 成次 有次 定清 正近 知徳

名

74	秋に謀反をおこすくはだて	宗貞
75	ものゝふは三井寺による月の暮	宗甫
76	むかへの駒やあしをいためる	立圃
77	夜に入し花見のかへさ気づかひて	有次
78	柳の樽のをもさうかがふ	利房
79	元日の御札にさるゝ奏者番	正能
80	よみてあぢはふ誹諧発句	成次
81	重箱にむすびそへたる文の中	立圃
82	思ふがカタへをくる沈香	定清
83	恋風はそより／＼と吹出て	正近
84	かごとのたねにならん尺八	有次
85	門立を何とて人のとがむらん	仲昔
86	飢にをよぶはあはれ乞食	宗之
87	ゆかりまで敵の筋をあらはされ	定清
88	算をく袖の名こそ高けれ	正近
89	大事にし思ふ病やなをるらん	宗順
90	ふかく執心なす歌の道	立圃
91	月の夜にこご舟長は若衆にて	宗貞
92	露よなみだよ折る水神	知徳
93	うばゝれし玉を秋にし求めかね	利房
94	何としてかはうたん鉄砲	成次
95	みのしゝはにくや度々荒出て	正近
96	軍の下知をきかぬ武者ぶり	有次
97	目に見ざる天狗のわざやなしぬらん	定清

ウ

〔注〕

(一)『十帖源氏 下』古典文庫、一九八九。

(二)『俳句講座二 俳人評伝上』明治書院、一九五八。

(三)本書贈書については、京都府立大学文学部日本・中国文学科「故新免安喜子氏寄贈書の概要」『資料館紀要』四五号、二〇一七、同「京都府立京都学・歴史館所蔵 新免安喜子氏寄贈連歌俳諧書目録」(京都府立大学文学部日本・中国文学科、京都府立京都学・歴史館、二〇一八)に詳しい。

(四)成立は片岡蓉子「六日の菖蒲——翻刻と解題——」『近世初期文芸』二号、一九七一)による。同論文が指摘するように『繫橋』(西村与八・河内屋太助版)に「六日菖蒲(二冊／立圃翁文集)近刻」とあるが、刊本の現存は確認できない。また同論文は享保八年刊『海音集』下に「六日の菖蒲と外題して三冊に成してみづから筆を染られたるを予秘蔵之置り」とあることから、自筆本の存在を示唆する。

98	くらき夜な／＼うつそら礫	正能
99	むら鳥をとめじと花の番をして	立圃
100	ちかづきけらし春の行幸	光忠

立圃	十三	成次	八	宗甫	四
利房	七	光忠	六	宗貞	三
有次	十一	宗之	五	正能	四
定清	九	宗順	五	久重	一
仲昔	六	正近	八		
知徳	八	了順	二		

(五) 当該句は『小町躍』(立圃編、寛文五年刊)「三月三日」の題に収録される。

(六) 柚木学「近世酒造業の技術的基礎」(『酒造りの歴史』雄山閣出版、一九八七)は、酒の生産用具が「甕から桶に代わるのが室町中期ごろから」であり「近世初頭になりようやく一〇石から二〇石入りの大桶ができてきた」こと、「仕込桶の大型化」が「近世酒造業における量産化の発端」であることを指摘する。『撰津富田俳諧紀行』の記述が文字通り「瓶」での醸造を指すとすれば、中世的な醸造方法を残していたことになる(今井美紀氏の「」指示による)。

(七) 『十帖源氏』(立圃著、万治四年刊)には初句「宮人に」の形で掲載される。

(八) 高槻市史編さん委員会『高槻市史 第二卷 本編Ⅱ』高槻市役所、一九八四。

(九) 松井良祐『富田丙午記』解題『立命館文学』五二六号、一九九二。

(十) 注九に同じ。

(十一) 本文は、松井良祐「入江若水兼通録『富田丙午記』(1)」(『立命館文学』(五二四・五一六・五一七・五二〇・五二二)六号、一九八九〜九二)による。

(十二) 『富田丙午記』巻一に「嬰兒(左兵衛利房／長兵衛重直)を高槻の城主土岐山城守殿へ(中略)人質に出し、自ら(引用者

注、勝由)ハ御軍用を達しける」とある。

(十三) 中部よし子「封建都市酒造業の展開——撰津国川辺郡伊丹郷を中心として——」(『封建社会の村と町』吉川弘文館、一九六〇)。同論文は「元高」を「明暦三年酒株制定の時の酒造米高と推定」し、「十七世紀中期には実醸額」であったことを指摘する。注八前掲書は、この元高を「富田村酒造業がもつともさかんであったころの姿を示す唯一の指標」とする。

(十四) 注八に同じ。

(十五) 注十三に同じ。

(十六) 注八に同じ。同書は「長福寺サロン」が「享保期の似雲の来庵などを頂点として紅屋酒造経営の衰退と運命をともし、江戸後期には凋落したようである」とする。

〔付記〕貴重な資料の閲覧および画像の掲載・翻刻の御許可を賜りました京都府立京都学・歴史館、公益財団法人柿衛文庫、閲覧・複写に際して御高配を賜りました国立国会図書館に深謝申し上げます。本稿は二〇一七年度柿衛忌での講演内容にもとづくものです。ご指示を賜りました今井美紀氏に厚く御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費16H06877の成果の一部である。

(かわむら えいこ・本学大学院文学研究科助教)